

箸墓古墳に眠るのは…

浮かぶ強大な権力者

大規模な周濠が初めて確認された、最古の巨大前方後円墳、箸墓古墳（奈良県桜井市）。これまで周濠の明確な痕跡は確認されておらず、学界でもその存在を疑問視する声が強かったが、墳丘を取り巻く巨大な周濠が築造当初から整備されていた可能性が高まり、当時としては類をみない大規模な土木工事を可能にした強大な権力者の威光を浮かび上がらせた。古墳に眠るのは卑弥呼なのか。再び邪馬台国へのロマンが広がった。（1面参照）

大規模周濠確認



周濠の一部の落ち込み状遺構。古墳前方部（奥）に向かって広がっていた
 11月6日、奈良県桜井市（小畑三秋撮影）



同古墳の墳丘は宮内庁の陵墓に指定されており、学術目的の発掘調査ができた

そのため、被葬者の納められた石室の構造などは、厚いベールに包まれている。こうした中、桜井市教委や奈良県立橿原考古学研究所は10年以上前から墳丘の周辺を丹念に発掘し続け、ようやく大規模周濠の存在を突きとめた。市教委の橋

当時、類を見ぬ土木工事

本棟彦主任は「60歳以上という周濠の幅は、実に古墳1つが入るほどの大きさ。周濠によって、被葬者と外部との隔絶性をより明確にしたのだろう」と推測する。

その被葬者はいったい誰なのか。

中国の歴史書「魏志倭人伝」には、2人の女王が登場する。それによると、呪術を通して君臨した卑弥呼の死後、戦乱が起こったが、卑弥呼一族の女性・臺与を後継に立てることでよ

うやく収束したという。卑弥呼の死は248年ごろとされるため、箸墓古墳の築造時期こそが力ギを握る。しかし、築造年代の根拠となる土器をめぐる

は、研究者によって数十年の開きがあり、いまだに論争の決着には至っていない。ただ今回、被葬者の強大な力リスマ性を物語る大規模周濠が確認されたことをきっかけに、被葬者論争はさらに高まりそうだ。



大規模周濠の存在が初めて確認された箸墓古墳と発掘現場（中央下）
 6月、奈良県桜井市（本社ヘリから、大塚隆彦撮影）

授（考古学）は「箸墓古墳を造るには10年以上かかる、卑弥呼の墓の時期に合致する」と卑弥呼説を提唱。「周濠などの調査は構造を明らかにする上で極めて重要。国なども本格的に乗り出すべきだ」と強調する。

一方、築造は260〜280年とみる寺澤薫・橿原考古学研究所総務企画部長は「被葬者は卑弥呼の後の臺与か、その後の男王では」と推測。卑弥呼の時代はライバルの狗奴国があり、決して万全な体制ではなかったとして、「男王の時代に王権の力が全国に及び、巨大な箸墓古墳を築くことができたのだろう」と指摘する。

同様に、卑弥呼説に否定的な石野博信・兵庫県立考古博物館長も「被葬者は臺与」の立場。「3世紀後半には全国の土器の動きが活発になり、交流や戦争などさまざまなことがあった。臺与は、魏志倭人伝にあまり記述がないが、業績は大きかったはず」と推測している。

発掘現場はすでに埋め戻され、現地説明会はない。

箸墓レーザーで丸裸

後円5段・前方3段明確に

最古級の大型前方後円墳で、邪馬台国の女王・卑弥呼の墓との説もある奈良県桜井市の箸墓古墳（3世紀中ごろ）の後半、全長約280メートルを上空からレーザー測量し、従来の測量図より格段に精度の高い情報が得られた。奈良県立橿原考古学研究所が5日、発表した。

「時期による古墳の形の変化を考えるうえで貴重な情報だ」という。箸墓古墳は宮内庁指定の陵墓として立ち入りが制限され、昭和初期までに作られた高さ1メートルの測量図しかなかった。橿原研は4月、航空測量会社「アジア航測」

（本社・東京）と協力し、ヘリコプターからレーザーを使って古墳を測量、50センチほどの大きさのものを把握できる立体地図を作った。墳丘の段数は、後円部が5段、これまで諸説があった前方部は3段であることが明確になった。後円部の墳頂の円丘を囲むように、高さ約40センチの環状の高まりがあることも確認された。

立体地図は6月17日、同県橿原市の橿原研付属博物館（0744・24・1185）で公開する。

（塚本和人）

デジタル版に動画

写真の航空写真（一部補正）と航空レーザー測量による古墳の立体地図をいづれも奈良県立橿原考古学研究所、アジア航測提供

